

2014年度「研究部会活動記録」

現代政治経済研究所

部会主任名	梅森直之	研究部会名	「東アジアの政治と思想」研究部会
研究課題 ：歴史的和解・民主化・アジア共同体の可能性			
月/日	活 動 記 録		
① 6/20	シリーズ「台湾史研究の回顧と展望」 場所：現代政治経済研究所会議室 報告者：松永正義（一橋大学名誉教授） 報告タイトル：台湾史研究の回顧と展望(6)：台湾文学史 参加人数：21名 活動報告：本報告では、日本統治期から現代までの台湾文学研究の変遷を台湾のみならず、中国、香港、日本を対象地域として跡づけ、研究者の政治的立場、方法の個別特殊性、中台関係という現実政治の緊張関係との関連性に焦点を当てつつ論じている。日本では、1960年代までは台湾文学研究は蓄積が乏しく、また政治的背景から研究対象も「台湾」ではなく「中華民国」であった。1970年代からは、アジアへの侵略・植民地問題の提起と絡んで戴國輝らの在日台湾人研究者の視点が台湾文学研究を活発化させるものとなった。台湾では、1960年代は文学研究において日本時代と戦後の乖離があり、台湾省文献委員会による「文学史」が主たる業績であったが、70年代から中国ナショナリズムにおける「抵抗の伝統」に依拠した形で日本時代の再発見が陳少廷らによって展開されていった。80年代になると、台湾においてナショナリズムの発達に沿って「台湾文学」という概念が確立され、陳少廷、葉石濤らによって文学史研究も芽生えた。中国でも台湾文学研究が始まった。台湾民主化を経た90年代以降、日本では「台湾研究」という領域の確立とともに文学研究の視点や方法も多彩なものとなり、原住民文学などにも光が当てられるようになった。台湾でもアカデミックな研究として台湾文学研究が成長をみせている。		
② 7/4	シリーズ「台湾史研究の回顧と展望」 場所：現代政治経済研究所会議室 報告者：陳 延媛（台湾中央研究院台湾史研究所） 報告タイトル：台湾史研究の回顧と展望(7)：「東洋史」と「国史」のはざま 参加人数：19名 活動報告：中央研究院の台湾史研究所にて「台湾史研究の回顧と展望」の一環として、戦後から2010年までの韓国における台湾史研究の整理を行ってきた。台湾の韓国研究者の韓国語能力の欠如という前提を考慮すると、自らが個別論著に対する記述や評論を下さないことで公正さ・研究倫理を保ち、学術史・文学史として充実かつ正確な論文目録を提供することで学界への貢献とすることを目指した。具体的には韓国歴史学界における分業と領		

	域分けについて学会を中心に分析した。 韓国史学界における国家主義と国史という観点＝韓国歴史学界に依然として健在するナショナリズムを中心とする立場においては、従来東アジアが実質的に中国と日本との関係のみで置き換えられる「東洋」として、国史としての韓国の歴史的地位が探索されていた状況から、近年は次第に研究者個人の東アジア論の方向へ広がりを見せつつある学界動向と関連して、90年代以降の台湾史ブームの高まりの中で台湾留学を経験した文明基などに代表される現代韓国における台湾史研究も、台湾史をその他の東アジア地域史と共に歴史共同体としての「東亜史」の中に位置づけ、東アジア世界を従来の中国・韓国・日本などの国家に寄ってのみ支えられてきた国史中心の視点だけでなく、同時に香港、沖縄、台湾など国境からはみ出た周辺地域という存在からの批判的視点から補完され修正されるべきといった新たなアジア論が展開されている。国史が往々にして国家間の歴史認識の対立問題として扱われる中、ジェンダーや人権などそうした構図から抜け落ちてしまうことを忘れてはならない。ちなみに韓国における台湾史ジャーナル論文毎年30本ほどある一方で、韓国における台湾史専門研究者がいないため、韓国で有名無実な「台湾（史）研究所」の乱立という問題も存在するが、個人的には、韓国において台湾史という研究分野が必ず必要であるという規範的立場にはないものの、これからどのように展開していくのか、第三者として楽しんでいる。（記録者：早稲田大学大学院政治学研究科博士課程・平井新）
③ 10/10	シリーズ「台湾史研究の回顧と展望」 場所：現代政治経済研究所会議室 報告者：飯島渉(青山学院大学文学部教授) 報告タイトル：「植民地医学・帝国医療」 参加人数：17名 活動報告：報告者は、植民地医学・帝国医療について、これまでの経緯と現状を紹介するとともに、今後の課題についても報告した。報告の内容は、主に以下の四点についてである。①「植民地医学」と「帝国医療」という研究分野の起源とその発展、②台湾における研究史の流れ、研究(?)アプローチの変遷、代表的な論文や最新の研究動向、③日本、韓国、中国、香港、東南アジアにおける医学・医療史の概観とそれぞれの特徴、④東アジアのモデル化、英領インドと東アジア諸国事例との比較、資料保存の現状と課題である。日本と台湾におけるこの分野に関する研究を比較してみると、台湾における医学・医療史の研究は、積極的に行われており、国内外の大学・研究機関等との連携が進んでいる。他方、日本において、この分野はほとんど未開拓であり、今後いつそうの検討が必要である。（記録者：早稲田大学大学院政治学研究科修士課程・魏逸瑩）
④ 11/21	シリーズ「台湾社会・文化研究の最前線」 場所：現代政治経済研究所会議室 報告者：三澤真美恵（日本大学教授） 報告タイトル：1950年代前半台湾の映画館における「国歌斉唱」プログラムの確立 参加人数：20名

	活動報告：本報告は、1950 年代前半、国民党政権下の台湾における映画統制の一環として表れた、映画館での国歌斉唱プログラムの立案および実施の過程について検討するものである。戦後台湾映画史をめぐる先行研究は 1990 年代以降、広がりを見せているが、国民党政権の文化政策のなかで映画をとらえたものは乏しく、映画館における国歌斉唱の問題の研究は存在しなかった。そこで報告者は、台湾の映画館における国歌斉唱という問題を「国民統合のための映画統制」という分析枠組によって、国民党中央改造委員会が国民宣伝工作に用いた内部資料『宣伝週報』をはじめ、多くの档案資料やメディア資料を使用して検証している。 国民党の台湾撤退から程ない 1950 年代前半という時期に、「中華民国国民」統合のナショナル・シンボルとしての孫文と蒋介石や青天白日旗が登場する国歌フィルムの上映や、「三民主義」を歌詞に盛り込んだ国歌の起立斉唱が、台湾の「国民国家」建設を志向した「儀式」として各地で積極的に行われたことが、報告者によって明らかにされた。（記録者：早稲田大学アジア研究機構台湾研究所客員次席研究員・遠藤正敬）
⑤ 12/12	シリーズ「台湾社会・文化研究の最前線」 場所：現代政治経済研究所会議室 報告者：陳培豊（台湾・中央研究院台湾史研究所研究員） 報告タイトル：「小節」から見た植民地台湾の残照～台湾歌謡曲に現れた政治、経済、エスニシティの葛藤～ 参加人数：26 名 活動報告：台湾は典型的な多言語、多民族的な社会であるため、エスニシティの相違により特色の異なる歌謡曲を有している。戦前、戦後を通して台湾語（閩南語）歌曲と国語（北京語、日本語）歌謡曲の相違点を見てみると、それは歌詞（言語）のほかに小節にある。小節は前者にとって、重要な要素であるのに対して、後者は小節を古臭くて低俗なものとして見なしている。歌謡曲とは世相を反映する鏡であるため、本報告は小節を通して台湾社会文化史を論述し、台湾の庶民の精神生活を探求する試みがある。本報告では、(1)小節と台、日歌謡曲の戦前、(2)戦後、台語歌謡に染み付いた小節、(3)小節に対する本省人、外省人の捉え方、(4)新世代による音楽の所有権の再定義、(5)「われわれの音楽」の再定義によって、戦前、戦後台湾歌謡曲の変容を分析した。 以上の内容を踏まえ、小節に対する捉え方の相違は、国語、台語歌曲間に境界線をもたらし、台湾社会の中にある異なるエスニシティの感情構造の葛藤に反映された、と本報告は指摘した。（記録者：早稲田大学大学院政治学研究科修士課程・魏逸瑩）
来年度の活動計画	・本年度同様に、定期的に研究会を開催し、研究を深める。 ・研究会での報告をもとに論文を公表し、研究活動の広報につとめる。
終了の場合	研究成果刊行の時期： 年 月（予定） 研究成果の公開方法：